

氏名	宮本 温子
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 8236 号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	人体塑造における「肉付け」の意味

主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋 正彦
副査	筑波大学教授		柴田 良貴
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	中村 義孝
副査	田園調布学園大学 准教授	博士(芸術学)	中原 篤徳

## 論文の内容の要旨

宮本氏の博士学位論文は、人体塑造における「肉付け」について歴史的、技法的観点から踏まえて考察し、その行為の持つ意味について制作者として探求したものである。その要旨は以下のとおりである。

### （目的）

本研究は、これまで著者は裸婦像を中心とした人体塑造制作を行ってきた。実際の制作を通し人体塑造における「肉付け」とはいかなる意味、効果があるのかを疑問として持ち、本論文では「肉付け」という行為の持つ本質的意味を明らかにすることを目的として全部で6つの章を立て考察を行っている。

### （対象と方法）

これまで、「肉付け」に関する研究は様々されてきたといえるが、作家個人について論じられたものが多く、本研究のように「肉付け」を体系化し概観しようと試みたものはほとんどないといえる。著者自身も制作者であることから、本論文での考察はこれまでに制作経験を通し得られた知見及び、多くの文献研究に基づいているといえる。

### （結果）

本研究は、最終的に以下のような3点の知見を提起している。

①「肉付け」という言葉は彫刻家が自身の制作観、造形観や作品について語る際に用いられる言葉で、主に塑造家に多く用いられる言葉で、粘土という素材の持つ自由さから、制作者によって作品完成に至るまでの方法や表出する形態が異なり、粘土という素材を用いて制作する行為に対してど

のような意味を持っているかによってこの「肉付け」という言葉が具体的に何を指し示すものであるかは様々である。

②塑造は粘土を積み、重ね、層を作り上げることでかたちづくられていき、積層感の有無や表出の仕方、影響はそれぞれに異なるが、形態を得るという共通の目的があるということが出来る。肉付けは粘土を重ねていくことで形態を得ていく行為を指し、目指し、得ようとする形態は生き生きとした量塊であり、生き生きとした量塊はそれ自身の持つ面が深く、互いに影響し関係し合い、面は量塊の内容、力、方向性を示しているといえる。粘土を積層させる行為は面を意識して積んでいき、この際意識する面は大小様々なかたち、方向を有したものでこれらの面が集合することで形態、量を得る事へと繋がっていく。また粘土を積み上げて行く際、重力を理解し重心を読み取ることは空間における量塊の構成を掴むことであると捕らえることができ、塑造家は1つの粘土付けを削っていく際にこれら複数のことを考え、意識しているということが出来る。

③各々の時代、地域の彫刻家たちが自身の造形観や美的感覚に基づき制作を行ない、そこには自身の表現への飽くなき追及心や人体に対する一種の執着心があったといえ、「肉付け」は制作者によって様々な解釈、表出の仕方があるといえるが、かたち、量を得ていくことが共通した意味であると捉えることができる。

#### (考察)

上記の結果を導くため、本研究では以下のような章立てにより考察を展開している。

第1章では近代彫刻において塑造の概念に革新的な考えをもたらした人物として、オーギュスト・ロダン (Auguste Rodin 1840~1907 フランス) の作品から、ロダンの肉付けの如何なる点が革新的でどのような表現的、技法的特点があるのかを技法的側面から「粘土による表現効果」において、またロダンの肉体への着目点、それが作品においてどのように表出し、効果をもたらしているか「身体への捉え方」の2点を中心として考察を試みている。

第2章ではまず「ロダン以降の肉付けの多様化」としてロダンと直接交流を持っており、互いに作品について意見交換できる関係にあったアントワーヌ・ブールデル (Antoine Bourdelle 1861~1929年 フランス)、アリストテッド・マイヨール (Aristide Mailliol 1861~1944 フランス)、ブランクーシ (Constantin Brâncuși 1876~1957 ルーマニア) の3名の彫刻家の作品を通し技法的な観点から考察を行い、「現代イタリア彫刻における肉付け」でジャコモ・マンズー (Giacomo Manzù 1908~1991 イタリア)、エミリオ・グレコ (Emilio Greco 1913~1995年 イタリア)、ヴェナンツォ・クロチェッティ (Venanzo Crocetti 1913~2003 イタリア) に焦点を当てている。

第3章では技法書からみる日本における肉付けの考え方を技法的観点より考察している。本章では文献研究を重点的に行うことによって、塑造という概念が明治期に再び日本にもたらされてから、様々な彫刻家達が自身の経験や彫刻観を基に記した技法書を用いることで技法的観点より概観したものである。

第4章では更に具体的な造形的観点からとして柳原義達の肉付けを《犬の唄》シリーズの変遷を通し検証している。柳原は作品が長い時間をかけ大きく変化し、自身の造形を常に追求し変化し続けていたということがいえ、その経過が作品上によく現れた作家であるという理由より、肉付けの変遷を通しその技法的意味を考察する対象として章を設け作品の変化に伴う肉付けの実際を明らかにしている。

第5章と第6章はより制作者としての観点として、制作を通して得られた知見を基に量の捉え方、石膏直付けとの関係及び差異、身体感覚との関係、また著者自身の作品を通し著者自身にとっての肉付けを考察し明らかにしている。制作者によって大きく異なる人体の量の分割について、個々の制作者の捉える彫刻的量感が実際に身体を構成する物理的量とは必ずしも一致しないため、量の捉え方は様々であり、どのように捉えるかは意図や造形感覚が現れるとし、肉付けをする際の量と面と形態の関係について論考している。形態を捉えるために1度量を分割し、それを基に面を意識し、面を与えるようにして粘土を付けていく。生き生きとした量塊は量の持つ面の捉え方による部分が大きく、面と量は互いに関係しあいながら内容、力、方向性を示すと捉えている。また物体が重力を受けその力に対し安定を取るために発生する重心について肉付け技法との関係を考察している。肉付けすることは重心と重力を意識し、影響を受けながら粘土を付けていくことでもあり、重心を知ることは物体がどのように空間上にあるのかを理解するための重要な手がかりになり、つ

まり重力を理解し重心を読み取ることは空間における量塊の構成を掴むことであると捉えている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

著者はこれまで「塑造」という方法で裸婦像を中心とした女性像の制作を行ない、具象彫刻の表現及び人を引き付ける形態や空間を思索してきた。「塑造」は素材の持つ自由さから作家によって、同じ人体を主題としても作品に至るまでの段階が異なり、表出する形態も異なる。狭義には粘土を積み重ね削ぎ造形を繰り返す中で求める形態を得ていく行為を指すため、言葉の指す範囲や意味が様々な捉えられ方をしてきたのである。このため、著者はこれまでの塑造に求められてきた「肉付け」について、近代彫刻の代表的な作家で知られるロダン、ブールデル、マイヨール、ブランクーシ、マンズー、グレコ、クロチェッティを取り上げて、作家の造形観とその表現を考察し、「肉付け」を行う背景に民族性や宗教観、人生観といった人格形成の根幹となる部分があるのではないかと推論している。また、著者は明治以降の日本での肉付けについて、様々な彫刻家達が自身の経験や彫刻観を基に著した技法書を渉猟して、肉付けについての作家の解釈を総合化し、分類を行った。これらを経て、具体的で技法的な観点から肉付けを考察し、制作には身体感覚を総動員しているという著者の考えのもと、主に挙げられる視覚、触覚等の感覚、及びその他の身体感覚と肉付けの関係性について考察し、肉付けを行うことは、重力を理解し重心を読み取ることであり、空間における量塊の構成を掴むことと結論つけている。

これまで、塑造における肉付けについて体系的に考察した論考は見られない。それぞれの作家によって語られてきたが、著者はロダンら近代彫刻の西欧からの影響も考慮しつつ、肉付けの持つ意味について集成を行い、塑造に基づく具象彫刻の根幹にかかわる用語について、総合的な解釈を行った点を高く評価したい。

平成 29 年 1 月 11 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。